

派遣者番号	R3K17	氏名	三上 泰弘
研究主題 —副主題—	特別支援教室における児童・生徒の目標を軸にした指導のあり方の研究		
派遣先	東京学芸大学 教職大学院	担当教官	村山 拓
所属	八王子市立上柚木小学校	所属長	町田 千恵美

キーワード：特別支援教室 通級による指導 インクルーシブ教育 個別指導計画

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

インクルーシブ教育システムの実現に向けた具体的方針として、都道府県の81.5%、政令指定都市の95.0%が「通級による指導の充実」を挙げている。（東京都教育委員会、2020）通級による指導の果たす役割が、インクルーシブ教育システムの実現のために改めて見直されている。

都内公立小中学校における通級による指導の新しい形態として、特別支援教室の導入が令和3年4月に完了した。同年3月には特別支援教室の設置目的や運営に関する「特別支援教室の運営ガイドライン」（以下「ガイドライン」という。）が東京都教育委員会から発行された。同ガイドラインでは、退室を検討する一種の指針として、「児童・生徒が自己の特性を理解して対応の仕方を学び、前向きに学習等に取組むことができるようになったかなど、在籍学級で感じていたつまずきが軽減したか」という視点が示されている。

特別支援教室を利用する理由、児童・生徒の目標は個々に異なる。特別支援教室利用児童の週あたりの指導時間は「2時間以下」が約9割を占めている。（東京都情緒障害教育研究会、2020）このような限られた指導時間の中で、在籍学級における支援への移行を目指すという特別支援教室の目的を踏まえると、児童・生徒の個々の目標に、より一層焦点を当てることが重要であると言える。具体的には次に示す2点が求められる。

- (1) 特別支援教室を利用する児童・生徒自身が個々の目標達成を強く意識しながら学校生活を送ること
- (2) 特別支援教室担当教員、在籍学級担任等が児童・生徒の個々の目標達成を強く意識して指導、支援にあたること

本研究では、個別指導計画に記載されている目標と特別支援教室における指導をつなげるためのツールを提案する。ツールを使用することで、児童・生徒自身及び教員が個々の目標達成に向けての意識を高く保つことができ、指導の効果が高まるという仮説を検証する。検証には、ツールの試行実践と意識調査を行い、最終的にツールを再提案する。

2 研究の方法

(1) 研究Ⅰ 都内公立小学校でのツール試行実践

ア 目的：ツール「めあてカード」を特別支援教室の指導で試行し、効果と課題を明らかにする。（表1）

イ 方法：学年や人数の構成がある程度異なる都内公立小学校特別支援教室拠点校3校を選定した。試行は、令和3年9月上旬～10月上旬に各校3～5回実施し、筆者が観察をした。協力者13名の試行実践に関する記録や電話インタビューの記録メモを分類した。

表1 個別指導計画記載目標とめあてカード対応例

個別指導計画記載の短期目標
・周囲の状況に応じた言動を身に付ける。
・見通しをもって行動できる。
めあてカード
・よいタイミングで発言する。
・予定を確認して行動する。

(2) 研究Ⅱ ツール活用に関する意識調査

ア 目的：ツール「めあてカード」に関する意識調査から、ツール活用の可能性や活用に関して留意すべき点を明らかにする。（表2）

イ 方法：規模がある程度異なる都内自治体（9市）から無作為に特別支援教室拠点校となっている都内公立小学校20校、中学校20校を選定した。令和3年9月上旬に各校宛てに意識調査用紙を送付し、各校の特別支援教室担当教員1名に調査への回答を求めた。調査は10月中旬までに郵送により回収した。

表2 ツール活用に関する意識調査項目例

・個別指導での活用
・小集団指導での活用
・在籍学級担任等との連携
・保護者との連携
・入学時の引継ぎ
・進級時の引継ぎ
・進学時の引継ぎ
・ツールを活用してみたいかどうか

3 研究の結果

(1) 研究Ⅰ 都内公立小学校でのツール試行実践

「自分のめあてを意識した行動や発言が児童に見られた」ことが、めあてカードの効果である。カードの効果として分類された記述数は計 87 であり、全分類の中で最も多かった。試行を通してカードの効果がある程度実証されたと言える。

指導回数を重ねることにより児童・教員の意識の高まりが見られること、意識の高まりがカード内容の記憶に寄与することが示唆された。

カード内容は短い文で書かれていること、扱いやすい大きさであることから、視覚的有効性及び即時性に効果的に働く可能性が得られた。また、在籍学級担任等との連携の可能性が記述に表れた。

特別支援教室の指導形態を指導に携わる全教員で確認することが、指導効果の高まりにつながることも示唆された。

(2) 研究Ⅱ ツール活用に関する意識調査

個別指導、小集団指導でのめあてカード活用への期待は、小学校、中学校共に高い水準であった。記述では、「めあての意識化」、「児童・生徒の主体性」、「自己理解の促進」、「視覚的な有効性」、「即時性」、「コンパクトであり扱いやすいこと」などが期待される効果として挙げられた。また、「合意形成の必要性」、「授業全体のねらいとの兼ね合い」などが疑問点、課題点として挙げられた。「他の児童・生徒の存在」は期待される効果となり得る場合と、そうでない場合があることが示唆された。

また、小学校から中学校への進学時の引継ぎに関して、肯定的な評価は小学校では69%であるのに対し、中学校では84%と大きな差が見られ、中学校教員による期待の方が大きいことが示された。つまり、中学校の特別支援教室担当教員が生徒の小学校段階の様子を理解するために、めあてカード活用の可能性があると言える。

そして、学習サポートスタッフ等、教員以外で児童・生徒に関わる大人に対する活用の可能性、学校における指導・支援の一貫性を保護者に示す際の有効性、児童・生徒が安心して指導・支援を受けられることに対し有効である可能性が示唆された。また、在籍学級でカードを使用することを想定した回答も得られた。在籍学級でのカード使用は、児童・生徒の抵抗感につながる可能性があることが示唆された。

さらに、指導の一貫性への効果、取り扱いやすい大きさの有効性等に関する記述も得られた。一方、中学生では、カード以外の方法をとることがより目標の意識化につながるのではないかという記述も得られた。例えば、個別指導計画そのものを活用するなどの具体的方法が挙げられた。

4 研究の考察

研究Ⅰ、Ⅱの結果を踏まえ、ツールの名称、形式、使用上の留意点等を以下のようにまとめた。これをもって総合考察、ツールの再提案とする。(表3)

表3 ツール「ナビカード」の提案

名称	ナビカード ※指導の中に「めあて」が複数存在する場合、児童・生徒の混乱につながる可能性が示唆されたため、名称の変更を提案する。
期待される効果	児童・生徒自身及び教員が児童・生徒の個々の目標達成に向かう意識を高く保つことができ、指導の効果を高めることができる。
大きさ	縦6 cm程度×横9 cm程度
作成方法	個別指導計画記載の目標(短期目標)を児童・生徒にも理解できる言葉に言い換え、カード形式に印刷する。
使用方法	○児童・生徒の目標への意識を高めるため、次のように使用することを推奨する。 ・特別支援教室における毎時間の指導の開始時に児童・生徒及び教員でカード内容を確認する。 ・指導中に適宜、児童・生徒及び教員でカード内容を確認、評価する。 ・指導の終了時に児童・生徒及び教員でカード内容に沿った行動が見られたかどうかを振り返る。 ○教員間の連携、児童・生徒理解の共有化を図るために、次のような場面での活用も期待できる。 ・特別支援教室利用児童・生徒の在籍学級担任等と特別支援教室担当教員との連携 ・保護者との連携 ・校内教職員の児童・生徒理解 ・進級時や卒業時・入学時の引継ぎ

5 今後の展望

本研究では、児童・生徒、特別支援教室担当教員、そして在籍学級担任等が一つのツールを介して児童・生徒の個々の目標達成に向かうことができる可能性が示唆された。「ガイドライン」では、「退室」は在籍学級における支援への移行と捉えられている。つまり、児童・生徒は特別支援教室の退室後も在籍学級における支援の下で学校生活を送っていく。今後、特別支援教室の退室後の本ツールの活用場面を検討する。